

今号のトピックス ■ コロナ渦の子どもの実態調査報告 ■ 鹿児島「アウトリーチ」報告

オンライン疲労 学習>ゲーム**群大など、小学生の保護者 1300 人に調査** (タイトル：朝日新聞 5.29)

「コロナ」臨時休校中の小学生メディア接触実態調査報告～小学生のオンライン学習／ゲーム・動画と疲労度の関係～ 科研費「ネット健康被害」調査・研究プロジェクトの調査報告遠隔記者会見(5月27日)をうけ、28日と29日の毎日、朝日、日経、群馬地方紙3紙、栃木地方紙2紙、青森地方紙2紙が報道しました(未集約あり)。

本調査は、2020年度科学研究費事業に採択されたTHInet副代表の伊藤賢一群馬大学教授(申請代表)のものです。採択結果については、本紙4月号でお知らせしました。

当初今年度中に「ネット長時間使用による健康被害の大規模調査」を行う予定でしたが、コロナ渦になり学校調査は見込めなくなりました。そこで、臨時休校中は子ども達がネット漬けになることが十分予想されたので、その実態を明らかにし、どのような健康被害傾向がみられるかを調べるため調査に踏み切りました。

子どもによる調査は不可能のため、Web調査で小学生の保護者を対象に行いました。全国1300名から回答が得られ、保護者の男女比は、6対4で都道府県の人口比にほぼ比例したサンプルが得られました。

生活実態は小学校低学年(1～3年)も9割がネット利用できる環境になり、4割の家庭が新たな端末を子どもに与え、8割以上に利用時間の増加がみられました。

われわれネット健康問題啓発者は、幼児を含め9割以上の子ども達を対象とした啓発と子どもを守るシステム作りを視野にした活動が求められる時期に来ました。

報告の詳細は、子どものネットリスク教育研究会のWebに掲載してありますのでお読み下さい。

子どものネットリスク教育研究会 <http://www.hiro-univ-netpat-otani.com/>

生活支援指導(アウトリーチ)」を始めて

NPO法人ネットポリス鹿児島サポーター 増田淑子

170cmの長身ながら体重38kgで立つ力もない中学2年の少年、発語を忘れた30歳代男性は、ほぼ20年間家にこもりゲームに明け暮れていた。どちらも、鹿児島県内で私たちが「ネット依存症生活指導支援」で対応した例だ。

ゲーム依存の子どもだけではなく、家族等へも知識や理解を深めてもらい、不登校や生活改善につなげる「生活指導支援」は2018年から始めた。昨年7月から今年3月までに延べ46世帯を訪問。対象者ほぼ全員が10代で中には8歳男児もいる。電話相談は139件にもなる。これに看護師1人とTHInet公認インストラクター2人、事務職員1人で対応している。最大のネックは相談のスケジュール調整。仕事を持つ保護者との面談や昼夜逆転した子どもへの指導は、基本的に夜が多い。少人数でしかも、昼間の健康被害等啓発事業と並行して行うには限界がある。

また、すべてが真性のゲーム依存というより、思春期特有の行為障害の一部として、心の居場所をメディア機器に求めている例も多い。複雑な家庭環境や社会情勢からやむを得ないかもしれないが、限られた場でもがく子どもの姿は痛々しい。成長期の子どもへの健康被害、また子どもの生活環境をどう調えるのか。周りの大人は勿論、子どもたちへの啓発の大切さを改めて思い知らされる。

さて、THInet公認インストラクターとして活動中の私、といえば「人前で話すのは苦手」で故に「書く」仕事に就いた。しかし、今では「自分の知識で何を繰り出せば(聞き手が)食いつくか」を模索する日々だ。当法人理事長のド迫力と尽きない引き出しの多さには足元にも及ばないが…